

パウロはエフェソに滞在した間中福音を語り続けました。この町では先週読んだような大きな騒動も起こりました。またパウロはこの町で投獄された、と推測する人は多い。またパウロ自身の手紙によれば、エフェソの町で野獣と戦った、と彼は書いています。獣とは一体何だったのか、わかりませんが、困難を極める戦いがあったことは想像できます。一方でかつて伝道したコリント教会が大きな問題を抱えてきたこともパウロの耳に聞こえてきました。パウロはそのために、「涙の手紙」とも呼ばれる手紙を書き送ります。コリント教会の中でパウロの語る福音とは異なる福音を語る人々があり、またその人たちに同調する人が教会の中にいたことに対して、パウロは厳しい語調で手紙を書き送るのです。

パウロはコリントの教会に行き直接教会の人たちと会うことを切望していましたが、まずパウロは手紙を送り、さらにテトスを派遣し、テトスから教会の様子を報告を受けるべくエフェソの町で待っていました。テトスからの報告は朗報でコリントの信徒たちはパウロの語る福音に立ち帰ろうとしていた。パウロはエフェソ滞在を切り上げ、コリントへ向かう決意をするのです。

エフェソ滞在中、パウロは内憂外患、内にも外にも困難にぶつかっていましたが、その中で、コリント教会の再訪を計画するのです。

使徒言行録の20章の1節から6節にはパウロがエフェソを出発してからの行程が書かれています。これを読んでわかるように、ルカはこのときパウロがどういう困難を抱えていたか、何に苦しんでいたか、というようなことをほとんど書いていません。なぜ、このような行程で教会を訪ね、伝道活動をしようとしたのか、その理由も何一つ書いていません。簡潔に行程が記されている。どうしてなんだろうか、という素朴な疑問は当然なのですが、ひとまず置いておきましょう。

このパウロの行程を地図を片手に見ると、疑問に思うことがあります。どうしてこんな遠回りのコースを選んだのか、ということです。エフェソから海路でコリントまで行けば、最短です。事実第2回目の伝道旅行の際は、コリントから海路で戻ってきているのです。にもかかわらずわざわざマケドニア州のフィリピ、テサロニケ、といった地を回り、コリントへと向かっているのです。彼の地の教会を訪ねたい、訪ねて、福音によって励まし、勇気づけたいと思いがパウロの中に強烈だったのでしょうか。そしてもう一つ、それぞれの教会からのエルサレム教会への献金を集める、という大事な用事もあったからだと思われます。パウロとエルサレム教会との関係については21章で詳しく

見ますが、とにかく、パウロはエルサレム教会を支援し続けた。諸教会をめぐり、エルサレム教会への献金を彼は集めていたのです。2節「そして、この地方を巡り歩き、言葉を尽くして人々を励ましながら、ギリシアに来て、そこで三カ月をすごした。」このギリシアと言われているのがコリントの町のことです。パウロはここで、コリントの教会の人たちと再会し、福音を確認し合うのです。そしてこのコリント滞在中にローマの信徒への手紙を書くのです。これは使徒言行録には一言も触れられていませんが、とても重要なことです。パウロにとってローマの信徒への手紙は彼が生かされている福音をもっとも鮮明に書き記した手紙です。そしてそれはパウロが福音伝道の人生を送る中で、福音にどう聞いていたか、ということを示すものでもあるからです。

三カ月にわたるコリントの滞在を終えて、海路で一気にシリア州へ向かおうとするのですが、ユダヤ人の陰謀があり、海路を断念して、同行者らと共に、陸路でまた来た道を通り、フィリピからトロアスに到着するのです。一行はトロアスに一週間滞在するのです。陰謀があり、ということはパウロに対して、反対する勢力が、いつもあった、ということです。

7節から12節にトロアスの町で起こったことが報告されています。週の初めの日にパウロたちがパンを裂くために集まっていると、パンを裂くとは聖餐のことですから、ここは日曜日に礼拝に集まっていると、ということです。翌日に出発を控え、今度いつ会えるかわからない思いもあってか、長い礼拝、また福音を語る時となったのです。人々はたくさん集まり、階上の部屋はいっぱいになり、夜中まで集会は続いていました。エウティコという一人の青年がパウロの話の聞いているうちに眠りこけて窓近くにいたのでしょうか、三階から下に落ちてしまう、ということがおこりました。人々急いで降りて行って彼を起こしてみると、もう彼は死んでいた。パウロも急いで降りていき、彼の上に身をかかめ、抱き上げて、「騒ぐな、まだ生きている。」そう云ってまた上上がり、集会をつづけた、ということです。パウロはこの青年を甦らせたのです。不思議な話です。この青年は本当に死んだのか、それとも死んだように見えたのか、という議論もあります。落下したショックで一時的に死んだように見えた、そしてパウロが声をかけて、蘇生した、というのはもちろんわかりやすい話です。しかし、ルカがここで報告しているのは、三階から落ちて死んだ青年が、パウロによって甦った、ということです。正直、わたしたちの理性や常識は、エフェソの町でパウロが起こした奇跡と同様、この青年のよみがえりも、よくわからない。しかしルカはこの出来事をわたしたちに報告するのです。この出来事は、パウロの力のあらわれではないでしょう。あくまでもパウロを用いて神が働いている、ということを物語る出来事です。

パウロに限らない、ペトロにしてもステファノにして、福音を宣べ伝えるものの歩みは死と復活の出来事なのです。伝道は自分の力ではない。神の働きによって進められるものだ、とは皆さんもよく聞くとところかもしれませんが。それはただ、伝道というのは、神さまのお働きなのですよ、ということなのではありません。わたしという一個の人間が神の前で、わたしたちが神の前で死ぬ、という経験なのです。それはパウロが伝道活動の中で、死ぬほどつらい目に遭ったとか、死の危険と隣りあわせだったというようなことは、まったく違うことです。キリストの福音によって生きること、信仰によって生きるとは、自分に頼らないということです。自分という存在が神に逆らって、神にではなく、自分に従って生きようとしている、自分に頼って生きようとしている。神の意志に逆らう。神の前で反逆している。それが人間の罪です。いつでも自分の意志や思いに従って生きようとする、その罪の自分に死ぬ、ということです。神に逆らって生きるものが、キリストの恵みによって生かされていることを知り、感謝してその恵みの中で歩み始めること、それが自分に死ぬことなのです。なぜなら神の恵みによって生かされている自分を知り恵みの中で生きようとするとき、人は自分によって生きようとする自分に死ぬからなのです。難しいことを言っているように聞こえるかもしれませんが、必ずしもそうではない。恵みによって生き始めるとき、人は自分によって生きようとする自分に死ぬのです。そしてめぐみの中で自分として、生きる。

伝道する、福音を宣べつたえる、自分にはそんなことはできないとか、自分はまだ勉強が足りないから無理だ、というのは自分によって生きることです。自分の力で、自分の思いで生きようとするから、無理だとか、できないとか前に出てくる。もちろん自分の力量で伝道ができると思ひ込むのも自分によって生きることです。

自分に頼るのではなく、神の恵みによって生かされていく、自分に死んで、恵みの中で生かされる、十字架と復活において生きる、とはそのようなことです。つまりこれは伝道とか福音を宣べ伝えることに限らない、キリスト者にとっての生きることそのものです。ルカはこの青年とパウロの出来事の中に、神の業を見ている。死んで、甦らされる。そのことを信じて歩むがキリスト者であり、そのことを信じて、福音を宣べ伝えていくのです。

最初にパウロはエフェソ滞在時から内憂外患、さまざまな困難、壁にぶつかっていた、と言いました。投獄されたり、騒動に巻き込まれたり、これまでの伝道地の教会とのことでも、パウロは心労を負っていました。それでもなお、パウロは福音を宣べ伝え続け、伝道した教会を訪問し続けた。だがルカは簡潔に行程を記すのみで、なぜパウロがこのような困難を抱えながら、福音を宣べ伝えたか、というについては何も書いていない、ということを申し上げました。

それはルカが知っていたからです。福音とは、自分に死に、神の恵みによって生かされることであり、福音を宣べ伝えるとは、まさに、自分の力ではなく、神の恵みによって生かされていくことそのものの証しだ、ということ。

パウロがコリントの町で書いたローマ信徒への手紙にはこういう言葉があります。「福音には、神の義が掲示されていますが、それは、はじめから終わりまで信仰をとおして実現されるのです。正しい者は信仰によって生きる、と書いてある通りです。」かみ砕くとこういう意味です。わたしたちが救われるのは、わたしたちが神からよしとされるのは、神さまのまことから生きることによってです。神さまのまこととは福音、イエス・キリストの福音、そこから生きる。自分の意志や自分の中の何かから生きることではない。そこから生きることによって、神のまことから生きる。そのまことを受けとめる信仰に生きる。それがわたしたちの救いです。自分に死んで、神の中に生きるのです。パウロはこの福音の中で生きている。この福音に生きて、伝道の旅を、歩んでいくのです。